

聖書：マタイ 8：18～22

説教題：キリストについて行く

日時：2018年12月30日（朝拝）

今日の箇所ではイエス様について行きたいと志願する弟子が二人現れます。前回の16節にある通り、イエス様は多くの人を癒し、その病気をみな直されました。そのみわざを見て、イエス様のそばにいたい！イエス様について行きたい！と思う人が現れたとしても不思議ではありません。今日の箇所の二人もそれぞれの思いを持ってイエス様に従って行きたいと思っています。しかしイエス様は彼らに、ご自分について来るとはどういうことなのか、主として従うとはどういうことなのかを示しています。そのおことばの前で、私たち一人一人もどうなのかを考えさせられ、良き導きをいただく一時でありたく思います。

一人目は律法学者です。彼はイエス様のもとに来て言います。「先生。あなたがどこに行かれても、私はついて行きます。」 聖書でしばしばパリサイ人や律法学者はイエス様によって偽善を暴かれ、イエス様に敵対した人たちとして出て来ますが、この彼はまじめです。よほどイエス様の教えとみわざに深く感銘を受けたのでしょう。「どこに行かれてもついて行きます！」と言っています。素晴らしい志の表明です。きっとイエス様も喜ばれたのではないかと私たちは想像しますが、実際のお答えはこうでした。20節：「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません。」何か冷たく突き放したような言葉です。彼の熱意に水を差すような言葉です。イエス様はここで何を仰ったのでしょうか。それはご自身の生活はある意味で狐や空の鳥以下であるということです。これらの動物たちは地の上をさまよひ、あるいは空を飛び回りながら放浪生活をしています。それでも自分たちの穴を持ち、巣を持っています。しかしイエス様には枕する所もない。今日、泊まる家が提供されても、明日はどうなるか分からない。絶えず移動し、生活の保証はない毎日の連続です。なぜイエス様はこう言われたのでしょうか。それはこの律法学者がイエス様について行く生活を安易に考えていたからでしょう。彼はイエス様を「先生！」と読んでいます。ユダヤ教の先生に向かって「ラビ！」と呼んでいるようなものです。自分は学者として、この先生について行けばもっと祝された生活を送ることができる。いつもそばで学び、新しい発見をし、学者としてさらなる榮譽につながる何らかのものを得させていただける。そのように期待した。しかしイエス様はそんな彼に、あなたが思い描いているようなものとは大きく違うのだ

よと言っておられます。あなたが思っているような安定した生活を送ることはできない。心地よい生活ではない。狐や空の鳥以下の生活であると。

なぜイエス様ともあろう大先生の生活がこういうものなのでしょう。その答えは一言で言えば「私たちのため」ということです。マルコの福音書 10 章 45 節：「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」 イエス様は仕えてもらうためにではなく、仕えるためにこの世に来られました。本来イエス様は神の一人子として、天で栄光のうちに完全な祝福を楽しんでいれば良い方でした。しかしイエス様は私たちの救いのために天から下り、神の国の福音を広く人々に伝えるため。そして最後に十字架にかかってご自身の命をささげるため、ここにおられました。振り返ってみれば、イエス様がこの世に誕生した時からそうでした。イエス様は宮殿や立派な家のベッドではなく、家畜小屋の中の現実にはきれいとは言えない飼料おけに寝かされました。そのようなイエス様について行くことは律法学者が思い描くような素晴らしい生活とは違います。自分のことよりも他者の益のために心と体を用い、そのために進んで辱めを受け、低い扱いを甘んじて受ける生活です。ですから人に仕えてもらいたいとか、良い生活をしたいと考えている人はついて来ることができないのです。それでもあなたはわたしについて来たいのかとイエス様は問うているのです。

私たちはどうでしょう。この言葉を聞いて、イエス様にはついて行けない、やっぱりついて行くのはやめにしておこうと思うのでしょうか。しかしイエス様は誰のためにこの歩みをしておられたのでしょうか。それは私たちのため、いや私のためです。そのことを知った私たちが「イエス様、ありがとうございます！でも私はあなたについて行くとはやめておきます！」というような応答をすることはあり得ないと思います。イエス様がなぜこのように歩んでおられるのか、その本当のお姿を見るなら、心から感謝してこの方の後について行く以外の道はないはずです。

ピリピ人への手紙 1 章 29 節：「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」 私たちはキリストを信じる信仰だけではなく、キリストのための苦しみも賜っているとあります。片方だけもらって片方は要りませんと言うことはできない。どちらも恵みです。両者はセットです。どちらも神からの恵みのプレゼントです。そして特にこの苦しみを通

して、私たちは本当の意味で訓練され、キリストに似た者となるというゴールに向かって聖められて行く者となります。私たちはイエス様にならい、イエス様について行く歩みを通して、人に仕える歩みは思っていたほど簡単ではないことを知ります。その経験を自分自身がいくらか味わうことを通して、イエス様は私のためにどんな思いでこれらを耐え忍んで下さったのか、そしてイエス様はどんなに私を愛して下さったのか、その深さの一端を知る者とされる。イエス様はそのような歩みを私たちに残しておられるのです。そのことを見据えて、正しい覚悟と祈りをもって、ご自分について来るように！と招いておられるのです。

二人目の弟子が 21 節に出て来ます。しかし彼は、まず行って父の葬式を出させて下さいと言っています。今日より家父長制の考え方が強かった当時のユダヤでは、父の葬式をきちんと行うことは息子の大事な義務でした。そんな彼にイエス様は 22 節のように言います。「わたしに従って来なさい。死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。」これもまた衝撃的な言葉です。ある人はこれを聞いて、キリスト教は親を大事にしないのか！と怒るかもしれません。キリスト教は薄情な宗教なのかと。そうでないことは聖書全体を読んだ人なら知っています。たとえばモーセの十戒は、その前半では神への愛について、後半では隣人への愛について語っていますが、後半の隣人愛のトップに「あなたの父と母を敬え」とあります。いかにこのことを大切に考えているかが分かります。またこの考え方は聖書の至る所に満ちています。しかし同時に聖書が強調していることは、人への愛・人への義務よりも神への愛・神への義務が絶えず優先するということです。人間の必要のためには神を後回しにしても良いという人間中心思想はキリスト教と相容れないものです。キリスト教は人間中心ではなく神中心です。その第一にすべきことを第一にする。そうする時に優先順位の 2 番目以降のことも正しく整えられて来るとというのが聖書の教えです。

22 節後半のイエス様の言葉も、そういう光の下で理解すべき言葉だと思えます。そこに「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい」とあります。実際の死人が誰かを葬ることはできませんので、最初に出て来る「死人たち」とは、この世に生きてはいるが、霊的に死んでいる人たちということになるでしょう。ですからこの意味は、イエス様に従うといういのちの道を退けて、この世の事柄にばかり忙しくしている霊的に死んでいる人たちに、それらのことは任せなさいということ。これは一見随分ひどい言葉のようにも聞こえます。葬式を軽んじているようにも聞こえます。しかしそれが

イエス様のポイントではありません。イエス様のポイントは、あなたにはそのことよりももっと優先すべきことがあるということ。言い換えればここで言われていることは「善」と「悪」の問題ではなく、「善」と「最善」の問題です。父の葬りは軽んじて良いものではありません。聖書にはたくさんの葬りの記事が出て来ます。それは神を礼拝し、神の栄光が現わされるための特別の機会であり、通常ならすべきことです。しかしもし二つの良いことが重なったらどっちを取るのか。そのいずれかを選ばなければならないという時に。これが難しい問題です。私たちは意味のないことはしません。自分が選び取っていることは、これこれこういう意味で意味あることなのだという理由を私たちは持っています。しかし問うべきはこのことです。すなわち私たちは「最善」のことはしないで、ただの「善」をしていることはないか。もっと重要なすべきことを脇において、それよりも優先順位が低い事柄で忙しくしてしまっていることはないか。今自分がしている「善」を一旦脇において、もっと自分が向かうべき「最善」があるのではないか。「あなたはそれを選び取りなさい」とイエス様は言っているのです。

この2番目の弟子の問題は「主よ！」とイエス様に呼びかけながら「まず」という言葉を他のことに用いていることです。「主よ、あなたに従います！でも、まずこのことを先にさせて下さい。それから従いますから！」これでは主を主と呼んでいることにはなりません。なぜなら「主」以外のものを「先に」持って来ているからです。先に持って来ている事柄の方が、その人にとっての主なのです。この弟子が今すぐは主に従えないと言っている理由は一見もっともです。さすがのイエス様も、この理由をあげれば、良いですよと言ってくれるのではないかと思った。しかしイエス様はこの人の言葉の根底にあるものを見抜き、試みているのです。このようにして主に従うことを第一にせず、安易に他の事柄を割り込ませるなら、この人はいつになっても本当に主に従う歩みはしないでしょう。私たちがなすべきことは日々たくさんあります。そのたびに「まずこれをさせて下さい」「これを片付けてからあなたに従います」と言っていたら、主に従う生活はどんどん後回しになります。私たちも自分の生活を振り返って、この人に似ていることはないでしょうか。「主よ、従います！でもまずこれを先にさせて下さい。」「主よ。私はあなたに従いたいです。でも今はこれをしなくてはなりません。」これはイエス様からすれば、従わない言い訳でしかありません。あの理由、この理由をあげて、そちらを優先する。こうなると信仰生活は自分に余裕ができた時だけのもの、趣味のようなもの、余暇の過ごし方の一つのようなものになってしまいます。これでは本当に主に従う生活はできない。問われていることは「善」と「最善」のどっちをあなたは選ぶ

のかということです。

マタイの福音書6章33節：「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」 ここにも「まず」という言葉が出て来ます。しかしこちらでは「まず」が「神の国と神の義」に結び付けられています。この第一にすべきことを第一に求める。そうする時に他の必要はすべて主の最善のお考えとお取り計らいによって備えられ、満たされ、守られて行く。家族の問題も同じでしょう。家族を与えてくださったのは神です。その神は私たちがまず神の国と神の義を求めることによって、その大事な家族を見捨て、犠牲にされるお方ではありません。イエス様はペテロの姑を癒してくださった方であり、マルタとマリヤの兄弟ラザロを生き返らせてくださった方であり、また十字架にかけられている時ご自分の母マリヤの今後の配慮をされた方です。私たちが持つべき信仰は、第一に求めるべきことを第一にして行くなら、その他のことは神が不思議な仕方で守り導いてくださるということ。優先順位を間違っはならないということです。その第一のことを後回しにして自分自身が霊的な死人となったら、元も子もありません。たとえ人間的・地上的な世話ができて、自らが神の祝福を失うばかりか、他の人にその祝福を取り次ぐこともできなくなってしまう。

イエス様の要求はある意味で厳しいものです。この言葉だけを聞くなら、誰がイエス様について行けるだろうかと思えます。しかしもう一度最後に心に留めたいのは、イエス様がこのように厳しく困難な道を歩んでおられたのは誰のためかということです。それは他ならぬ私の救いのためでした。神なるお方が人となり、私たちを罪の滅びから救い出すために、このような道を進んで選び取って下さいました。そのイエス様のお姿を正しく見つめるなら、私たちはただただ感謝して、この方の後について行く以外に選択の余地はないのではないのでしょうか。そして実はこのイエス様について行く歩みにこそ、この世のあらゆる楽しみをはるかに凌駕する喜びと満たしがあるのです。私たちを愛してこのようにへりくだり、尊い救いをくださるイエス様を益々知り、この方との交わりに生きる以上の幸いはありません。またそこに、私たちが造り変えられ、やがての栄光へと至るためのいのちの道が用意されています。この二人の弟子がイエス様の言葉にどう応答したかは書かれていません。それはこの箇所を私たちが他人事のようにして読んで終わりにしないためです。ここを読んだ一人一人が自分の歩みをもって答えるためです。このイエス様の言葉の前で自分の生き方をもう一度考え、自らの応答をもって、

この続きを書いて行く者たちでありたいと思います。